

彗星だより

1928a 彗星 その後方々でこの彗星は観測せられてゐるが、パークレー天文臺のベルマン・ミホイ・プル兩氏は次の如き軌道を算出した。早く兩氏が出した極く大略の軌道からは大分改正せられて前に掲げたクロンメルン氏のものに餘程よく似てゐる。

近日點通過時	T	1928年1月31.07272萬國時
近日點引數	ω	$8^{\circ} 39' 5.3''$
昇交點黃徑	Ω	$124 \quad 56 \quad 5.8$
傾斜角	i	$8 \quad 3 \quad 45.1$
離心率	e	0.502786
近日點距離	q	1.86636
周期	P	7.23732年

この彗星は最初からテラー彗星(1916年近日點通過のもの)に多分同一のものだらうミパークレー天文臺のロイ・シユナー氏はいつてゐたのであるが、クロンメルン氏は大分これを疑がつてゐた。ミころがヤーキースにゐる張氏が木星の影響を計算してみたミころ大した擾亂を受けたらしくないので全くこの彗星ミテラー彗星ミは同一のものではないミいふこゝである。

1928b 彗星 この彗星の發見のこゝは前に誌したこゝであるが、その後に来た報導によるミパーセロナのコマス・ソラ氏が3月25日にミつた寫眞にはうつらなかつたそうである。しかし、パリ天文臺のミヌール氏が觀測によるミ十等半の明るさで3月28日萬國時23時0.2分の位置は

赤經 $6^h 12^m 26.s 5$
 赤緯 $+14^{\circ} 57' 39''$ (視位置)

その日運動は赤經に $+3^m 16^s$ 、赤緯には $0'$ ミのこゝである。これを見るミ前の報導の赤緯がゲンゲンかわつてゆくミあつたのは 90° 丈け方向を誤まつてゐたものらしい。

その後マドリッド天文臺のカラスコ氏が觀測したので同氏は今迄の3つ

の観測から軌道を計算した。尙ほクロンメリン氏は最初の二つの観測とその運行の工合から軌道を計算してあつたのであるが双方よく似た値になつてゐる。

カラスコ氏			クロンメリン氏		
近日點通過時 T 1928年3月26.9414萬國時			4月2.33萬國時		
近日點引數 ω	346°16.8	} 1928.0	336°58'	} 1928.0	
昇交點黃經 Ω	195 21.3		206 33		
傾斜角	2 48.0		3 13		
近日距離の對數 Log q			9.99764		

その後クロンメリン氏はカラスコ氏の観測を用ゐて、即ち全く同一の材料から軌道を算出してゐるが、昇交點黃經に1°以上の差違を生じてゐる。これは全く計算にも人によつて功拙があることを示すものである。

他の彗星 昨年は今頃までには既に四つ五つの彗星が発見せられてゐた筈であるが今年は僅かに二つ発見せられたに過ぎない。尙ほ本年近日點へ歸つて來る筈の彗星はホルムスミテラーが期待せられてゐるが、ホルムスは既に豫定せられた近日點通過は過ぎ去つて終つた。たゞ地球からの距離はまだまだ近きづゝあるから満更ら望みのない譯ではない。最も地球に近づくのは11月の初め頃であるが、しかし相當かすかなものだらうこの豫想である。

テラー彗星の近日點通過は10月終り頃で B. A. A. の Handbook に掲けられてある豫報位置は次の通りである。(1928 6 20 上田)

萬國時 G ^h 1928	近日點通過を10月21日として			近日點通過を10月29日として		
	赤經	赤緯	南中時刻	赤經	赤緯	南中時刻
7月 17	5 ^h 4.2	+13° 6	9時 24分	5 ^h 14.1 ^m	+12° 58'	9時 3分
	5 25.7	13 49	9 14			
8 2	5 47.7	14 24	9 5	5 53.5	13 24	8 53
	6 10.2	14 50	8 56	5 57.5	14 2	8 43
	6 33.2	15 7	8 47	6 19.9	14 22	8 34
	6 56.6	+15 14	8 39	6 42.7	+14 34	8 25